



Art World Insight : 欧州発アート先読み

フランス・シャトーの展覧会で考えた「アート体験と空間の力」

2025.9.8

#現代アート

ホワイトキューブ（均質な白い壁の空間）を飛び出し、空間や建築をアート作品の一部として取り込む試みが近年、盛んになっている。アート体験は作品だけでは完結しない。展示空間や建物の歴史、観客の文化的背景、展示デザインの工夫、さらには展示を支える資金のあり方までが、アート体験の意味を左右するからだ。今年6月に開催したコンテンポラリーアートの展覧会「Forget Me Not」を例に、展示空間と作品の関係性、これからの可能性について考えてみたい。（貝谷若菜）

時代と文化が交差し、華やかな空間を演出

馬車に揺られているかのように、木々に囲まれたでこぼこの小道を車で抜けると、17世紀に建てられた城館、シャトー・ド・ラントウイユ（フランス・ノルマンディー）が姿を現した。広大な庭やアンティーク家具、肖像画に囲まれた空間は、かつてここに暮らした一族の歴史を今も物語っている。

ロンドンを拠点に活動する中国出身のアーティスト、許陽（Xu Yang）が「Forget Me Not」で見せたのは、18世紀フランスのロココ様式に、中国オペラの仮面や陶磁器、清朝の意匠、オランダ静物画、さらには花や動物といった日常的なモチーフを重ね合わせた作品群。時代や文化が交差しながら、空間全体に華やかな世界を立ち上げていた。キュレーションはVon Goetzアートアドバイザーのルーシー・フォン・ゲッツが手がけた。

アート体験を形作る社会的文脈と空間

歴史を振り返れば、作品の評価は社会的状況によって大きく揺れ動いてきた。ナチスが近代美術を“退廃芸術”と呼んで排除したことは有名だろう。当時は異端とされた作家たちが、いまでは美術館の中心的な存在になっている。近年では、長く顧みられなかった女性作家を再評価する展覧会がフェミニズムの文脈のもとで数多く開かれている。社会的文脈の変化が作品に新たな意味を与え続けている。

文脈を形づくるのは社会だけではない。建築空間もまた、作品の意味や役割を大きく変える。特に歴史的建物を舞台にした現代アートは、その空間が持つ象徴性をどう扱うかによって、全く異なる体験をもたらす。2010年に村上隆がヴェルサイユ宮殿に作品を置き、ダミアン・ハーストが14世紀に完成した歴史的建造物、フィレンツェのパラッツォ・ヴェッキオ（Palazzo Vecchio）で展覧会を開いたことはよく知られている。

村上の《Murakami Versailles》展は、話題として消費された側面もあったが、意図してか否か、作品が背景に溶け込むのではなく、むしろヴェルサイユそのものが展示の一部として再解釈される余地を生んだ点で興味深い。美の象徴として鑑賞されてきた宮殿が、ナンセンスで“低俗”とも映る作品を通して、「権力とイメージ流通」の視点を与えられたのである。観客は遺産をただ敬う視線から一歩引き、宮殿が王権を誇示するための舞台だったこと、そして美や権威も社会の仕組みの中で作られてきたにすぎないことを、どこか滑稽さをもって突きつけられる体験となった。

Art.nikkei.com, 08/09/25. By Wakana Kaitani.

フランス・シャトーの展覧会で考えた「アート体験と空間の力」

それに対して「Forget Me Not」では、戦時中のドイツ軍支配を含む400年の歴史をもつ建築が、やや「歴史ある建物」として扱われるにとどまっていた印象を受けた。展示は装飾性が高く目を奪われたが、多彩な引用は説明的で、観客に想像を委ねる余白は少なかった。それと同時に歴史的建築と現代アートの関係をどう緊張感あるものにできるか、その問いを投げかける場でもあった。

もちろん、建築の存在意義そのものを問い直すような批評的空間である必要はない。ただ、歴史ある空間を使うからこそ、作品と建築の関係をもう一步深める余地があるのではないだろうか。

「問い」や「余白」が生む奥行きあるアート体験

観客に「説明」ではなく「問い」や「余白」を与えること。そこにこそアート体験の奥行きが宿る。だからこそ近年、展示デザインや空間の文脈づけが改めて注目されている。

そして、展示をかたちづくる上で大きな役割をもつのが作品の意味や文脈を編むキュレーターとその構想を体験へと翻訳する展示デザイナーだ。かつては白い壁と均一な照明に囲まれたホワイトキューブが当たり前だったが、この10年ほどで展示空間は大きく変化してきた。歴史的建造物を舞台にしたコンセプチュアルな作品や、壁の色や光を工夫した展示、デジタルを組み込んだ体験型の演出など、いまや展示は「見る場」から「体験する場」へと進化している。

舞台美術家としてガゴシアンやロイヤル・アカデミー・オブ・アーツなどでの展示を手がけてきたセシル・デゴスも、その変化を肌で感じてきた一人だ。彼女は「いまではモダンやコンテンポラリーの展示でも壁に色を使うことが議論できるようになり、美術界全体がよりオープンになった」と語り、自らの役割を「観客が心地よく過ごし、作品同士の関係性を自然に感じ取れるように整えること」と定義する。動線や比率、色彩や遠近感に細やかに気を配りながら、ときに強い個性を持つ建築空間とも調和させてきた。



Art.nikkei.com, 08/09/25. By Wakana Kaitani.

フランス・シャトーの展覧会で考えた「アート体験と空間の力」



セシル・デゴスが上海・浦東美術館で手がけた展示風景(©Cécile Degos, Musée de Pudong Chine 2025)



記憶に残る空間をつくるのが大切と語るセシル・デゴス (© Alix Marnat)

「派手ではなくても、記憶に残る空間をつくるのが大切。観客の頭に“あの展覧会の空間”というイメージが残れば成功です」とデゴスは言う。彼女は現在、2026年に東京で開催される展覧会の舞台美術も担当しており、その視点が日本の観客にどのような体験をもたらすのか注目される。

空間や建築に耳を澄ませ、アートを深く楽しむ

美術館やギャラリーを訪れるとき、つい作品そのものに目を奪われがちだ。けれども、その作品がどんな場所に置かれ、どんな空間をつくり出しているのかに注目してみると、体験の厚みはぐっと増す。展示空間や建築の文脈に耳を澄ませること。それはアートをより深く楽しむための、ちょっとしたコツなのかもしれない。